

対人関係の流動性と社会的拒絶に対する敏感さの関連に関する 発達的变化の検討

(中間報告)

玉川大学脳科学研究所 山田 順子

The relationship between interpersonal mobility and rejection sensitivity A cross-sectional study in adolescence

Tamagawa University Brain Science Institute, YAMADA, Junko

要約

社会関係からの拒絶は、個人の健康に大きな悪影響を与える。こうした社会的拒絶に対する敏感さは、北米人と比べ日本人でより強いことが示されている。先行研究では、こうした社会差のパターンについて、社会環境における対人関係の形成および組み替えの自由度である関係流動性によって、社会関係からの拒絶がもたらす損害の大きさが異なるためだと説明している。一方で、比較文化研究では、特定の社会で優勢とされる心理傾向のパターンには年齢による差異が見られ、特に未就学児では成人で観察されるようなその社会で優勢となる代表的な心理傾向のパターンが必ずしも観察されないことを示している。先述した関係流動性と社会的拒絶に対する敏感さのパターンについて、その発達的变化を追った研究はこれまでない。そこで本研究では、思春期世代の子どもたちを対象に研究を行い、関係流動性と拒絶への敏感さ、および両者の関係の発達的变化を検討する。

【キー・ワード】 関係流動性, 対人関係, 社会的排斥

Abstract

Being rejected from desirable social relationships could be harmful to one's health. Previous studies showed that Japanese people tend to be more sensitive to social rejection as compared to North Americans. This culturally dominant pattern could be interpreted as a result of the difficulties of forming and replacing social relationships (Relational mobility: RMob). However, cross-cultural findings suggest that culturally dominant patterns in certain psychological tendencies differ by age. Specifically, previous studies indicated that culturally dominant patterns were not observed in the early stages of development. There have not been any studies examining developmental changes in the levels of the RMob, rejection sensitivity, and their relationships. Therefore, we conducted a cross-sectional study among adolescents to examine variances in perceived RMob, rejection sensitivity, and the relationship between RMob and rejection sensitivity.

【Key words】 Relational mobility, Interpersonal relationships, Social Rejection

問題と目的

望ましい所属集団や社会的関係からの拒絶は、個人の心身の健康を悪化させるほか、学業成績の低下や反社会的行動の増加といった様々な悪影響をもたらす (Hutchison et al., 2007)。こうした社会的に拒絶されることによる損失は通文化的に観察されるが、その損失の大きさは社会環境によって異なることが示されている。

先行研究では、当該の社会環境における対人関係の取捨選択の自由度である関係流動性 (Yuki & Schug, 2012) によって、社会的な拒絶による損失の大きさが異なることが明らかにされた。例えば大都市のように頻繁に人の入れ替わりが生じる高流動社会では、もし既存関係から拒絶されたとしても、比較的容易に代替となる関係を見つけられる。これに対し、伝統的な「村社会」に代表されるような人の入れ替わりに乏しい低流動社会では、個人は歴史的に継承され確立されてきた既存の社会関係に組み込まれ、自由に社会関係を形成したり組み替えたりすることが困難である (Adams et al., 2004; Yamagishi et al., 2008)。こうした環境では、既存関係からの拒絶は社会的孤立をもたらす重大な損失となる。それゆえに、高流動社会に比べて低流動社会では、こうした損失を回避する上で有用となる、他者からの拒絶や集団内の不和への敏感さが顕著なパターンになる (Hashimoto & Yamagishi, 2016; Sato et al., 2014)。

一方で、比較文化研究ではこうした特定の社会環境で優勢とされる認知傾向や心理傾向の発現が、年齢によって異なることを示している (e.g., Lee et al., 2017; Senzaki et al., 2016)。特に未就学児では、成人で観察される特定の社会で代表的な認知・心理傾向のパターンが必ずしも観察されない。このことから、先述した日本において特徴的とされる社会的拒絶に対する敏感さや、関係流動性と社会的拒絶に対する敏感さのパターンに関してもまた、その発現が年齢によって異なる可能性が考えられる。

ここで重要なのは、関係流動性は社会環境の特性であり、年齢のような個人の特性とは独立である点である。一方で、年齢によって個人を取り巻く社会環境の特性が異なることは考えられる。例えば年齢が上がると、子の社会関係に対する親の関与度は下がっていく。また進学に伴い部活動や選択授業、大学進学といった子ども本人の自由意志に基づく所属集団や社会関係の選択機会も増える。関係流動性の分散やその効果は、こうした自由意志に基づく社会関係の取捨選択が可能になってから出現するだろう。このことから、関係流動性が社会的な拒絶に対する敏感さに与える影響もまた、年齢とともに強くなるだろうと考えられる。

そこで本研究では、10-18歳の男女に質問紙調査を実施し、彼らを取り巻く社会環境の関係流動性および社会的拒絶に対する敏感さや、関係流動性が社会的排斥への敏感さに与える影響の強さが年齢とともにどのように変化するかを検討する。

方 法

参加者 研究対象者は10歳から18歳の男女とする。現在は男子33名、女子28名の計63名の募集が行われている ($M_{\text{age}} = 12.08$, $SD_{\text{age}} = 2.45$)。調査は複数回に分け実施され、一回の実験につき図書カード3,000円分が謝礼として各参加者に渡される。

方法 参加者に質問紙調査を実施する。本研究では、年齢間の比較可能性を考慮し、全年齢に対し同一の尺度を用いる。このため、一部の尺度は文言を修正するほか、必要に応じて同席する保護者または研究者が説明を行う。

参加者を取り巻く関係流動性の測定には、関係流動性尺度 (Yuki et al., 2007) の文言を子ども向けに修正して用いる。参加者は、「彼ら (あなたのまわりにいる人たち) には、人々と新しく知り合いになる機会がたくさんある」など12項目について、「1. まったくあてはまらない」から「6. ひじょうにあてはまる」の6点尺度で回答する。

社会的拒絶に対する敏感さの測定には、杉浦 (2000) の親和動機尺度、岡田・渡田 (1992) の児童用評価懸念尺度、および児童用排斥不安尺度短縮版 (Children's Rejection Sensitivity Questionnaire, CRSQ) (Downey et al., 1998) を用いた。

親和動機尺度では、拒否不安に関する9項目 (例:「仲間から浮いているように見られたくない」) と親和傾向に関する9項目 (例:「人とつきあうのが好きだ」) に、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5点尺度で回答する。

児童用評価懸念尺度では、「人が私のことをどう思おうが、気にならない」など34項目について、「はい」または「いいえ」のいずれかで回答する。

CRSQ では、6つの日常場面を描いたシナリオが提示され、それぞれの場面における不安の強さ、苛立ちの強さ、他者からの受容期待について6点尺度で評価する。具体的なシナリオ例を、図1に示した。

問1. あなたは、ある日 友だちとひどいけんかをしました。いま、あなたは大きな問題をかかえていて、友だちと話ができたらなあ、と思っています。あなたは、授業のあと、友だちと話をするために、彼または彼女を待つことにしました。あなたは、友だちがあなたと話をしてくれるだろうかと思っています。

図1 CRSQのシナリオの具体例

本研究は玉川大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会による承認を受けて実施される。

現在の進捗状況

以下では、現在まで募集している 63 名について分析の途中経過を報告する。

まず、本研究で測定する各尺度の信頼性を検討するため、それぞれの標準化信頼性係数を算出した(表 1)。児童用評価懸念の下位尺度のうち、肯定的評価への懸念の信頼性係数が若干低いものの、概ね高い信頼性が得られている。

表 1 各測定尺度の標準化信頼係数

	標準化信頼性係数 (Std. a)	項目数
関係流動性	.77	12
親和動機尺度		
拒否不安	.94	9
親和傾向	.91	9
児童用評価懸念尺度		
否定的評価への懸念	.86	11
否定的評価の予期	.76	9
肯定的評価への懸念	.51	6
肯定的評価の予期	.81	4
児童用拒否不安尺度 (CSRQ)	.81	18

次に、年齢による関係流動性の分散の変化について検討した。以下では、等分散性の検定に必要なサンプルサイズが確保できている小学生 (10-12 歳) のみを対象に行った分析の結果を報告する。その結果、平均値に有意差はないが、年齢によって分散が異なることが示された, Bartlett's $K^2(4) = 14.22, p < 0.007$ (図 1)。年齢が上がるほど関係流動性の分散が広がるという結果のパターンは、本研究の予測とも合致する。

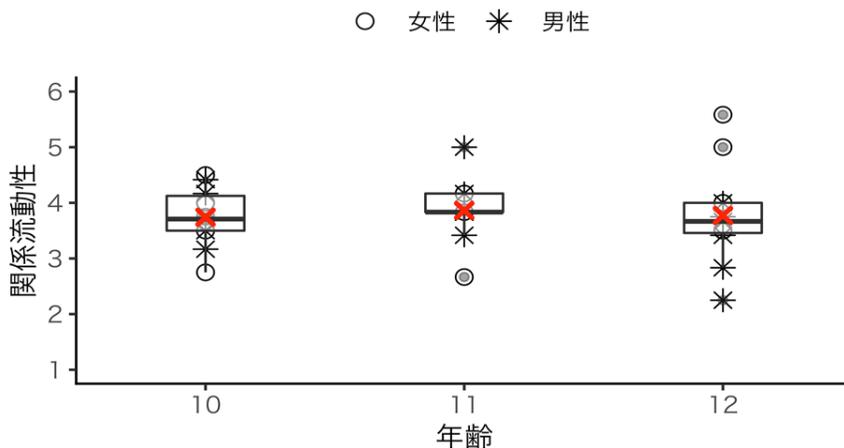


図 2 関係流動性の年齢別の平均と分散 (箱ひげ図中の × 印は平均値を示す)

一方、社会的な拒絶に対する敏感さや、社会的な拒絶に対する敏感さに対する関係流動性と年齢の交互作用（年齢と共に関係流動性と社会的な拒絶に対する敏感さの関連が変容するかどうか）については、現時点では予測と合致するパターンは得られていない。社会的な拒絶に対する敏感さの各得点を目的変数、年齢と関係流動性および交互作用を説明変数とする回帰分析の結果、いずれの主効果ならびに交互作用も有意ではなかった。また、社会的な拒絶に対する敏感さを従属変数、年齢を独立変数とする一元配置分散分析の結果でも、年齢の主効果は有意ではなかった。

今後の実施計画

現在までに得られたデータから、尺度の信頼性はある程度高いことが示された。また、関係流動性の年齢による分散については、小学生のみが対象であるものの、年齢とともに関係流動性の分散が上がるという予測と合致する結果が得られた。今後、調査を進め13歳以上のデータがある程度揃った上で、同様のパターンが得られるかを検討する予定である。

また、現段階では、社会的な拒絶に対する敏感さについては、年齢や関係流動の効果、ならびに年齢と関係流動性の交互作用効果のいずれも見られなかった。ただし、社会的な拒絶に対する敏感さについては全年齢において十分なサンプルサイズが得られていなかったため、今後データが揃った上で検討を行う予定である。

引用文献

- Adams, G., Anderson, S. L., & Adonu, J. K. (2004). The cultural grounding of closeness and intimacy. In I. D. Mashek & A. Aron (Eds.), *Handbook of closeness and intimacy*. (pp. 321–339). Lawrence Erlbaum Associates.
- Downey, G., Lebolt, A., Rincón, C., & Freitas, A. L. (1998). Rejection Sensitivity and Children's Interpersonal Difficulties. *Child Development*, *69*(4), 1074–1091.
- Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (2016). Duality of independence and interdependence: An adaptationist perspective. *Asian Journal of Social Psychology*, *19*(4), 286–297.
- Hutchison, P., Abrams, D., & Christian, J. (2007). The Social Psychology of Exclusion. In D. Abrams, J. Christian, & D. Gordon (Eds.), *Multidisciplinary Handbook of Social Exclusion Research* (pp. 29–57). John Wiley & Sons, Ltd.
- Lee, H., Nand, K., Shimizu, Y., Takada, A., Kodama, M., & Masuda, T. (2017). Culture and emotion perception: Comparing Canadian and Japanese children's and parents' context sensitivity. *Culture and Brain*, *5*(2), 91–104.
- 岡田守弘・渡田典子. (1992). 評価懸念および自己制御感から見た児童の学校不適応感の測定について. *横浜国立大学教育紀要*, *32*, 151–187.
- Sato, K., Yuki, M., & Norasakkunkit, V. (2014). A Socio-Ecological Approach to Cross-Cultural

- Differences in the Sensitivity to Social Rejection: The Partially Mediating Role of Relational Mobility. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45(10), 1549–1560.
- Senzaki, S., Masuda, T., Takada, A., & Okada, H. (2016). The Communication of Culturally Dominant Modes of Attention from Parents to Children: A Comparison of Canadian and Japanese Parent-Child Conversations during a Joint Scene Description Task. *PLOS ONE*, 11(1), e0147199.
- 杉浦健. (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係——その発達的变化——. *教育心理学研究*, 48, 352–360.
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008). Preferences versus strategies as explanations for culture-specific behavior. *Psychological Science*, 19(6), 579–584.
- Yuki, M., & Schug, J. (2012). Relational mobility: A socioecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G. E. Adams, & A. D. Kunkel (Eds.), *Relationship science: Integrating evolutionary, neuroscience, and sociocultural approaches*. (pp. 137–151). Washington D.C.: American Psychological Association.
- Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). *Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society* (CERSS Working Paper, pp. 1–10). Center for Experimental Research in Social Science. Hokkaido University.